

義務教育学校（小中一貫教育）と学校運営協議会を活かした地域と 学校の協働による「ハイブリッド教育」 —岐阜県義務教育学校白川村立白川郷学園の取組—

石原学¹⁾・安藤由美子¹⁾・新谷さゆり²⁾・益川浩一³⁾

¹⁾ 岐阜県環境生活部環境生活政策課

²⁾ 白川村教育委員会事務局

³⁾ 岐阜大学地域協学センター

1. はじめに

コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）は、学校と地域住民等が力を合わせて学校運営に取り組むことが可能となる「地域とともにある学校」への転換を図るための有効な仕組として、平成16年に「地方教育行政の組織及び運営に関する法律（地教行法）」第47条の5に位置づけられた。平成29年3月に地教行法が改正されて学校運営協議会の設置が地方公共団体の努力義務となるとともに、同時に改正された社会教育法にも地域学校協働活動が位置づけられ、「学校を核とした地域づくり」の推進が求められている。

白川郷学園では、平成25年度から学校運営協議会制度を導入すると共に、平成29年度から義務教育学校（小中一貫教育）として、地域と学校の協働による「ハイブリッド教育¹⁾」を推進している。

2. 白川郷学園について

白川村は岐阜県北部に位置する人口1,600人弱、高齢化率32%の山村である。白川村荻町地区は、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として平成7年に富山県五箇山の菅沼・相倉地区と共にユネスコの世界文化遺産に登録された。豪雪地帯であり、冬季、厳しい生活が強いられる土地であるが、以前から「結」と呼ばれる生活や生産の全般にわたる近隣の協力体制があり、現在でも合掌造り家屋の屋根の葺き替え作業などにおいて受け継がれている。

昭和30年頃の白川村には、白川小学校・中学校、平瀬小学校・中学校と多くの分校が存在していた。しかし、児童生徒の減少により中学校は平成4年度に、小学校は平成23年度に統合され、小中一貫教育校として白川郷学園「白川小学校・白川中学校」となった。平成29年4月からは、一体的な校舎で「義務教育学校白川郷学園」としての新たな歩みをはじめている。

【学校教育にかける思い】

地理的な条件から、義務教育を終える15歳までに「ひとりだち（学校教育目標）」の礎を育てることを学校教育の必須課題とし、「自立」「共生」「貢献」の3つの資質を育成する教育を推進し、コミュニティ・スクール、義務教育学校の仕組を活かして、将来の白川村の「担い手」育てへとつなげようとしている。

白川郷学園の教育は、学校が地域の人々と目標やビジョンを共有し、地域と一体となって子どもたちを育む「地域とともにある学校」であり、協働の取組を通じて地域の将来を担う人材を育成し、自立した地域社会の基盤の構築を図る「学校（子ども）を核とした地域づくり」を推進する、新しい時代の学校と地域の在り方を示すもので、実装までつなげている先進的な取組である。

3. コミュニティ・スクールと地域学校協働活動

白川郷学園では学校運営協議会を設立するにあたり、学校と教育委員会、地域支援者との間で○1村1小中学校の白川村だからこそできる学校運営協議会をめざす ○様々な立場の目線をもった委員を選ぶ ○会議の方法はKJ法などを取り入れ委員の主体性を大切にする ○小中全学校職員の共通理解のもとコミュニティ・スクールの活用性を考えていく という4点を確認して、コミュニティ・スクールの取組を始めた。

学校運営協議会では「どんな白川っ子になってほしいか」を熟議し、「夢・誇り・自信をもった自立した白川っ子」、「思いやりにあふれ あいさつができる白川っ子」、「ふるさと白川郷を愛し村を大切にする白川っ子」が共通の願いとして確認された。その実現のために地域としてできることとして、「だれ」が「どんなことをする」とよいかを『1. 学校と地域が一緒に取り組むこと』・職場体験支援・ふるさと学習・郷土資料や教材づくり・あいさつ運動への協力、『2. 地域が取り組むこと』・子ども会や自然学校活動の充実・地域行事の充実・大人の

あいさつ改善 ・伝統芸能文化の継承 ・登下校の見守り」、「『3. 家庭で取り組むこと』 ・礼儀作法 ・家庭学習に対する親の見届け ・子どもの夢を聞く耳をもつ ・家庭教育(ふれあい)」として、具体的に分類した。その具現に向けて(後の地域学校協働活動につながる)「学校支援部(学校教育の中に地域の教育力を取り入れふるさと学びをより充実させる)」「地域活動部(大人と子どもがかかわる場を増やし、地域の一員として子どもを認めていく活動を充実させる)」が学校運営協議会内に組織され、活動を推進している。

4. 具体的教育活動

義務教育学校となった平成29年度からは、9年間の一貫教育の中で、学校運営協議会(地域学校協働活動)と連携した「ハイブリッド教育」をさらに推進してきた。

白川郷学園の水川和彦校長は、学園の特色として、義務教育学校は9年間のスパンの中で、前期課程(小学校)から教科担任制や部活動を導入できることや、成長の段階として4年間を主体性育成期、2年間を多面的思考育成期、3年間を総合的発信力育成期とした系統的な指導が可能となること、9年先の自分の姿を描きながら学びの成果を振り返ることができることなどのよさを語る。地域との連携のもと、「山菜採りや田植え」や「議場でのコンサート」、「各務原市や韓国との交流」、「書家や南極観測隊員の招聘」、NEXCO 中日本と連携した「クロサンショウウオの保護活動」「SAでの白川郷いなり販売」や金沢大学との「防災教育」、トヨタ白川郷自然学校(滞在空間を併せ持つ環境配慮型施設)や合掌造り保存会等と連携したバーチャルではない本物の体験活動を年間100回以上行っている。平成30年度には、総合的な学習の時間、生活科と道徳の時間を組み合わせた「村民学²⁾」を開始し、教科往還的指導の推進にも取り組んでいる。

また、学校運営協議会長の和田正人氏、学校支援部長の山田俊行氏は、この白川郷学園学校支援部の取組を次のように話している。

- ・「知識や技能、考え方を教えるのではなく、白川の大人の生き様を伝えたい。」という願いのもと、「どうしたら、学校と協働していけるか、私たちの思いを伝えていけるか。」を学校支援部で検討し、先生方と調整した。私たち、地域が求めているものを先生方と協働して作ったものが「村民学」になった。
- ・本当は学業を修めたら白川村に帰ってきてほしいが、帰村できない状況であっても故郷のことを忘れないで村外で活躍することも期待する。だからこそ、よいことばかりでないところを見せて考えさせている。
- ・村民学のテーマについて何から学ぶかを決めたら、学校支援部は学びに合った担当地域住民(F A: ふるさとアドバイザー・ふるさとアシスタント)を人選して各学年に配置し、担任は1年間を通して担当F Aと共に学びを深めている。
- ・児童生徒の受け身ではない主体的な姿を作るために、具体例を示すこと、調べてきて発表したことは「見つけたね」と評価するとともに、新たな疑問を聞いてアドバイスをしている。
- ・村民学のF Aを含めた「人材バンク」を作り、先生が困らないよう学校と協働している。

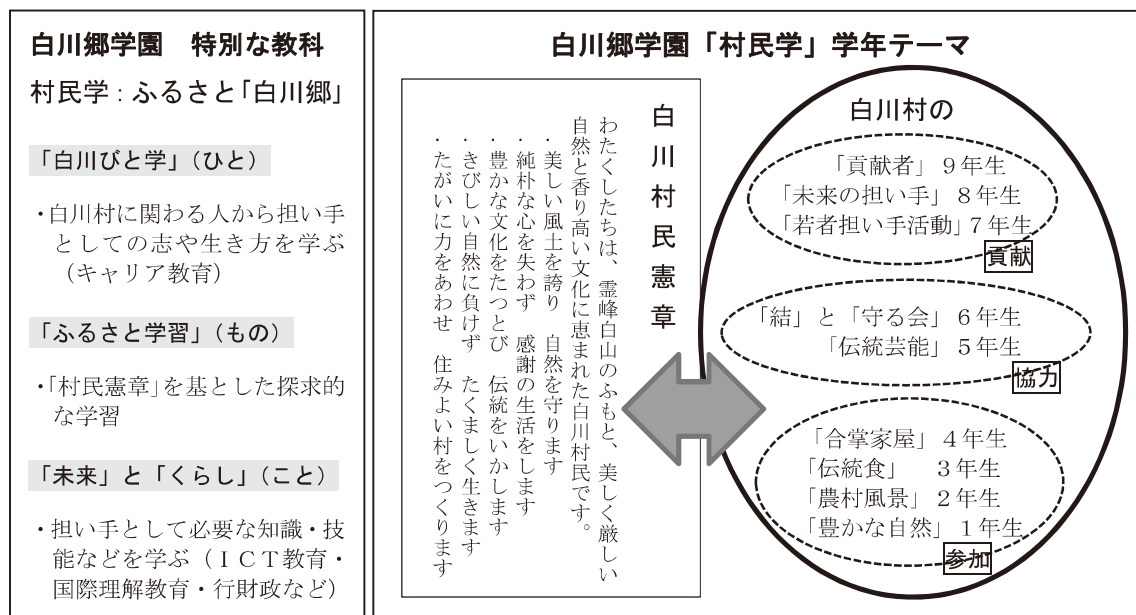
(1) 村民学の取組

これまでの総合的な学習の時間の指導を基礎とし、「ふるさと学習」や、本物を知る人の生き様や身近な人の生き様から学ぶ「白川びと学」、村の行政等を学ぶと共に各種教育を行う「未来」と「暮らし」を、既存の教育活動とのつながりを大切にしながら編成した、特別な教科「村民学」を始めた。白川村の事実を学ぶ、支える人の生活を学ぶ、自らの生き方を考えることを中心に、白川郷を科学する内容となっていると、白川郷学園研究主任の亀原修一教諭は話す。

村民学は、学校教育目標「ひとりだち」にむけ、身に付けた資質・能力を、汎用的な能力に高め、社会の一員としてたくましく生きることにも留まらず、白川村村民憲章の具現にもつながる担い手の育成を目指したものである。知識や体験をもとに、人の思いや知恵を学ぶことで、自分の生き方を確立することをねらいとし、多様な他者との関わりが仕組まれている。

例えば、8年生の村民学「未来の担い手」の内容は、「ふるさと学習」として「平瀬宿泊体験、職場体験学習、未来会議での提案」(35/70時間)、「未来」と「暮らし」として「平瀬研修、立志式、ふるさと魅力体験事業」(25/70時間)、「白川びと学」(キャリア教育)として「シンガーソングライター、書道家、元南極観測隊員、副村長、元山岳警察官から学ぶ等」(10/70時間)となっている。人に着目し、子どもたちが学びたいくなる課題で、白川村の具体を学ぶことができるよう

図1. 特別な教科「村民学」の内容とテーマ (出典:「白川郷学園」学園経営全体構想をもとに筆者作成)



に組み込まれているだけでなく、PTA親子行事での地域食材の調理実習、社会「中部地方」、国語「魅力的な提案をしよう」、数学「資料の整理と活用」などの教科との往還も考えられている。

村民学の中心的な役割を担う学校運営協議会では、めざす担い手の姿を「ふるさとへの熱い思い(夢と誇り)を胸に白川村に貢献できる“ひと”」として、学校や児童生徒と共に定義し、そのために村の大人がやらなければいけないこととして、次の4点を村内住民とも共通認識している。

- ・「村に貢献できるひとを担い手として育てていきたい!」と、子どもたちや若者に発信していくこと。
帰村できない状況であっても、どこにいても担い手として「村に貢献できるひと」であって欲しい
- ・子どもたちと深く関わり「村を思う気持ち」を育む体験活動やふるさと学びを進んで行くこと。
見る、知るだけでなく、教わる、体験する、聞く、話す、感じる事が重要で、大人との関わりは不可欠
- ・村が今求めている貢献内容や、村への様々な貢献方法などを子どもたちに積極的に伝えていくこと。
「帰村する?しない?」ではなく、貢献内容や方法を具体的に伝えていくキャリア教育
- ・現在担い手となっている大人が、姿で「村への貢献」を子どもたちに見せていくこと。
大人の主体的でいきいきと活動する姿を子どもたちに届けていけるようにするための意識改革

(2) 南部地区文化会館(学園分教室)の取組

「南部地区に子どもの学びの声を届けたい」という願いのもと、7年前に廃校となった旧平瀬小学校を改修した会館を拠点として、1～9年生が平瀬地区の自然や文化、歴史等を学ぶ取組を行っている。地元住民が参観すると共に、講師としても参加しており、村内住民の交流にもつながっている。児童生徒は村民の生の声に触れ、村で生きることの課題と面白さを学ぶことができている。

(3) ふるさとを深く学ぶ週間(キッズウィーク³⁾)の取組

伝統のどぶろく祭りが開かれる9月・10月に連休を設定し、児童生徒は地元の祭りに関わることで伝統文化を深く学び、その学びを作文や学級新聞等にまとめ、村民文化祭等で報告した。学校運営協議会地域活動部は、各地区の関係者約60人を事前に集め、キッズウィーク中の支援の在り方を地区ごとに考え、地域のなかで子どもたちを育む意識を高めた。

5. 考察

12月8日に白川郷学園で「研究発表会・地域公開日」が実施された。そこでの児童生徒や地域住民の姿から、学校運営協議会を活かした地域と学校の協働による「ハイブリッド教育」の成果の

一端を報告する。

【授業参観（後期課程8年 国語）】

単元：論旨を捉えて 題材：話し合って考えを広げよう パネルディスカッションをする
「自分の将来の夢の中で白川村はどんな存在だろう ～白川村とどうかかわって生きていくか～」
を課題にパネルディスカッションを行う授業で、ある生徒は主張の中で次のように話した。

- ・副村長さんから、以前に大きな災害があり、村行政として防災に力を入れていると聞いた。
- ・父から何度も聞いていたことが、副村長さんと話したことで一致した。
- ・私もふるさとを守りたい。
- ・兄は遠くにいる。私は、できれば家の近くに住んで守りたい。
- ・どぶろく祭りのときに、多くの警察の方が警備に来ている。たとえ故郷に住めなくとも、役に立つ人として貢献できるのではないか。
- ・育ててもらった白川村に貢献しながら、自分のやりたいとこができないかと思っている。

自分の考えを整理しながら落ち着いた口調で話す様子は、「未来」と「暮らし」の学習で、実際に副村長と村の行政について話したと普段の家族との話題が結びついて、自分は何ができるかを探して、人の役に立つという夢と故郷を大切にしたいという現実の折り合いを付けながら考えてきたことがよくわかる姿であった。この生徒に限らず、それぞれの生徒が「一人一人の夢を大切にすること」「村外で活躍すること」と「いつも故郷とつながっていること」「故郷のために何かができる私になる」ことを、14歳なりに現実を見据えながら、自分の考えを持って主張する姿に驚くとともに、白川郷学園の教育の成果を強く感じた。

【こども未来会議】

平成30年度で5回目を迎えるこの会議は、みんなで白川村の未来を考えることを目的とし、学校運営協議会と学校の協働で開催している。担い手育てとして、子どもたちに「自分の考えを大人に堂々と語る場」を設けたい、という願いから始まった会議だが、実際には大人にとっても貴重な場となり、誰もが村の一員として熱く語り合う場となっている。会議は、白川村の未来を考える「10年後の白川村、そして白川郷学園」をテーマに、提言とグループ討議が行われた。前半は、生徒・青年・成人がそれぞれの立場から、下記内容の提言を行った。

会場は多くの人との関わりが育てた生徒の姿を見守る地域住民の温かな眼差しが溢れていた。

写真1 公開授業の様子



写真2 未来会議の様子



- 生徒
- ・「朝、挨拶をしてくれる〇〇さん、お帰りと迎えてくれるのは〇〇や〇〇のおばあちゃん」
 - ・「大きくなったなあ」と声をかけてくれる。自分の事を知ってもらえていることが本当にうれしい。「人と人とのつながり」は、まるで学校のような村。
 - ・引き継ぐということは、白川村のよさを伝えていく私になること。
 - ・「住んでいない人が、来たいと思ってもらえる村」を作りたい。 (9年生)

- 青年
- ・10年前と変わらない祭りが続いている。子どもの時から祭りの役割を担っている。
 - ・戻ってきて感じるのは、祭り(文化)を守っていくという行為に「つながり」の魅力があるということ。
 - ・10年前にはなかった学校の姿がある。地域、学校、子どもたちの結びつきが強い。地域の良さを知る機会が増えた。 (村外専門学校卒業後に帰村)

- 成人
- ・「自分たちで食べるものは白川村で作っている」と自慢したい。
 - ・この15年間で外国人観光客が2割から6割に増加した。家族も海外で努力している。外国語は必須である。村の良さ、生活の知恵、それがわかる経験をしてほしい。
 - ・様々なところで働いてきた人たちが、「白川村で働きたい」と選んで来てくれることが増えた。「他人にも親身になってくれる村」であり続けたい。 (親・祖父母世代)

「みんなのためになる村を作りたい」という声を聞きながら、多様な世代と一緒に考えたことによるリアルな体験は、子どもたちの育ちに多大なプラス影響を与えることであろう。

後半は、5～9年生と地域住民が班を作り、テーマについて討議した。各班では「どぶろく祭りや合掌造りといった伝統や文化を守り続けたい。」「将来、どこへ行っても村を思い続けたい。」「といった児童生徒の素直な思いが語られていた。話が深まってくると、子どもたちの「自然や文化を大切にし、誰もが案内できる村」という意見に対して「自然が豊かで環境が良いと言うが昔と同じではない。もっといろいろな場所で遊ぶべきだ。」といった高齢者の意見や、「若者や移住してきた人が暮らせるように働ける場をつくりたい。」という意見に対して、「村独自の産業は難しい。なかなかお金を回せない。」といった現実的な大人の意見が出されるなど、児童生徒の思考をさらに深めていく議論がなされた。満足度等の指標では表せない学びの姿があった。

6. まとめ

白川村のハイブリッド教育（地域学校協働活動）の成果を、学校運営協議会長の和田正人氏は、素晴らしい学校経営に感謝しつつ、地域が大きく育ったと評価する。多くの児童生徒とかかわる中で、恥ずかしい姿は見せられないと大人の意識が変わり、願いを共有して会議を重ねることで各団体や地区の温度差が解消されてきた。子どもたちの話の中で、観光、人口減少、空き家対策など、役場の中と同じことが語られるようになった。「守り続けることが未来」、「村に貢献したい」という子どもたちの声を聞き、地域としてこんな嬉しいことはない。学校の形態が変わり、赴任してくる学校教職員と白川っ子を育てると同じ立場で語り合えることが何よりも語る。

また、携わる地域住民が「何のために話し、関わり、考えているのか」を理解して、支援者としてではなく担い手を育てる者として主体的に活動していることも大きな変化となっている。

児童生徒は課題を追究し続け、「村に貢献したい」と自信をもって語る。この裏には、生きた学びがあったことが容易に推察できる。荻町地区が世界文化遺産に指定された二十数年前、指定地区の内外、関係業種等により、多少の温度差があるように感じた。現在、白川郷学園を核として、子どもも大人も自分たちの故郷である地域の暮らしについて考え続け、適する答えを自分たちの力で創り出す営みにより、地域づくりの担い手として、そこで生きる人の力につながっていることを強く感じた。白川郷学園の子どもの姿や成長は、かかわっている人、支えている多くの人の喜びになっている。地域に住む人の思いを知り、育つことは、故郷を好きになることであり、担い手を育てることにつながっている。白川郷学園の教育とその思いは、見守る村民すべてに広まりつつある。

和田正人会長、水川和彦校長が語る「小さな村の大きな発信」は、地域も先生もわくわくするようなハイブリッド教育、白川郷学園の子どもの成長の姿として、誰が見ても素晴らしく、高い評価を得ている。学校は、村民学と教科等との往還の教育的効果を明らかにするとともに、カリキュラム作成に取り組んでいる。学校運営協議会は、子どもの姿と共に地域の姿も評価（見える化）していく工夫をすることで、地域づくりとしての機能をより高めていこうとしており、今後がさらに期待される。

（注）

- 1) ハイブリッド教育：学校の教育活動に地域の教育力を導入した地域と学校の協働による複合した学び。
- 2) 村民学：「ふるさと学習」、「白川びと学」、「未来」と「暮らし」からなる、白川村を教材にして学ぶ特別な教科。
- 3) キッズウィーク：夏・冬の長期休暇の一部を秋に分散させてつくる大型連休。保護者と共にさまざまな体験ができることが期待されている。

（引用文献・参考文献）

- 1) 白川郷学園「地域と学校を繋ぐ学校運営協議会立ち上げに向けて」（「地域とともにある学校づくり推進フォーラム」事例発表資料）を参照した。
- 2) 白川郷学園学校運営協議会「地域公開日」配布資料を参照した。
- 3) 白川村全戸配布広報「将来の担い手育て」を参照した。